様　式　Ｃ－７－１

平成２５年度科学研究費助成事業（科学研究費補助金）実績報告書（研究実績報告書）

1. 機関番号　3 2 6 0 4　　2. 研究機関名　大妻女子大学

3. 研究種目名　新学術領域研究（研究領域提案型）　　4. 研究期間　平成２５年度～平成２６年度

5. 課題番号　2 5 1 1 9 5 1 0

6. 研究課題名　視線随伴パラダイムとその応用による階層的行為主体感の発達過程の解明

7. 研究代表者

研究者番号	研究代表者名	所属部局名	職名
9 0 5 2 6 7 3 2	ミヤザキ　ミチコ 宮崎　美智子	社会情報学部	助教

8. 研究分担者

研究者番号	研究分担者名	所属研究機関名・部局名	職名

9. 研究実績の概要

自閉症スペクトラム者は自分の行為の意図性に対する気づき（行為主体感）に困難を示すことが知られているため、その発達過程にも非定型性が示される可能性が高い．我々は乳幼児向けに開発した行為主体感の定量的評価課題（イメージ・スクラッチ課題）を用い、まず行為主体感の定型発達過程を明らかにすることを試みた．具体的には、8～9カ月のデータに加え、定型発達の4～5カ月、18～20カ月児を対象としてイメージ・スクラッチ課題を実施し、成人の行為主体感の有無に伴う視線パターンとの比較を実施した．

これまでの我々の検討から，イメージ・スクラッチ課題において行為主体感を反映すると考えられるのは，１．視線－画面変化の随伴性違反に対する探索的眼球運動（Exploration Rate：ER），２．削り出す絵の面積量を増加させるための視線調整，である．１．については，8カ月群のみが成人と同様の傾向を示した．自らの視線が逐次的に注視点として表示されるWGP（with gaze point; WGP）条件では，行為主体感を抱けていると推定される乳児（ER ≧ 0.187）の割合が高く，自らの視線が逐次表示されないNGP(no-gaze point ; NGP)条件の結果と対照的であった．一方，4カ月群では，8カ月群や成人では随伴性検出が困難になるNGP条件において随伴性違反に対する高い敏感性が示された．このことは，自分の眼球運動に関する視覚的フィードバックが逐次的に呈示されずとも，4カ月児は視線－画面変化の随伴性検出に優れている可能性がある．また，18カ月群では，視線―画面変化の随伴性違反に対する敏感性は4カ月群に比較して有意に低く，注視点の有無による条件間差も見られなかった．18カ月群では，知覚器としての目，すなわち「見る」機能への特化が影響している可能性がある．

２．の削り出した絵の面積量に関しては，成人群・8カ月群の主体感／推定主体感あり群のみ，課題前半から後半にかけての面積量の増加が認められた．